前のページへ
次のページへ

「第４次富士見町総合計画」特別委員会で審査

第４次富士見町総合計画の基本構想は、この計画の目的にあるように『本町の進むべき方向性を示した羅針盤であるとともに、自立のための行財政運営の確立を図る』ことを目的としています。

この計画は、平成19年度から平成26年度までの８年間を計画期間とし、「第１編　第４次総合計画の策定にあたって　第１章から第７章」と「第２編　目標別基本構想　目標０から目標５」とで構成されており、今後、この基本構想に基づいて、前期４年、後期４年の基本計画が策定されます。

議会では、町の今後の方針を定めるうえで非常に重要な案件であることから、特別委員会を設置し、町からこれまでの経過と計画の内容について詳細な説明を求め、慎重な審査を行ないました。この特別委員会における審査内容について、お知らせします。

●質疑の内容（抜粋）

質問　合併構想について曖昧さが残る。複数解釈が出来る表現であれば、合併構想の研究を進めていたとの表現がいいのではないか。構想が無くなったという表現は、削除すべきでは無いか。

説明　合併構想の記述内容は社会情勢の流れから考えれば、常識的な範囲で正しいと考える。

質問　財政計画の予測についての見込みの数字は、最悪のシナリオを考えているのか。現在ある負債についての住民負担を入れて策定してあるのか。

説明　計画としては中庸の計画と考えている。現時点での想定の範囲内で、各事業を積み上げていくなかでのリスクを含めたもので計画を考えている。リスクの中には税収減、地方交付税減も想定している。

質問　構想は目標、方向性を表すものであり、10年を８年とした具体的理由はなにか。

説明　４年間の計画とするほうが、町民には分かりやすく、審議会の意見としても４年とされた。

質問　子どもの人権保障の施策から、子どもの権利条約の必要性をどう考えるか。

説明　施策イコール人権宣言とは考えていない。今後、考えていく部分もある。

質問　将来像としての「世界に展かれた高原の文化都市」は、キャッチフレーズで理論ではないということか、どのように解釈されているか。

説明　「世界に展かれた高原の文化都市」は、第２次総合計画から20年間示されてきたもので、キャッチフレーズとして第４次総合計画で改めて明確にするべきものでもなく、町民にも浸透していると考えられ、特に取り上げるものでもない。

質問　審議会の答申で協働をキーワードとし、概念としているがなぜなのか。協働の必要性はなぜか、考え方、取り組みは。

説明　協働は国を挙げての流れであると認識している。定義は十分醸成されていないのは事実であるが、情報の共有、対等な立場で知恵や力を出して、走りながら考えて協働することについて醸成をしていく。

審査の結果、原案のとおり賛成多数で可決すべきものとしました。